

松原市指定文化財調書

文化財の種類：有形文化財 美術工芸品 彫刻

記 号 番 号：考第 1 号

指 定 年 月 日：令和 4 年(2022)9 月 29 日

名 称・員 数：^{たつべいせきか}立部遺跡^{そうぼしゆつど}火葬墓^{すえき}出土須恵器^{ぞうこつき}蔵骨器^{つぼ}(壺・蓋)
^{つけたり}附^か火葬骨^{そうこつ}ほか^{ない}火葬墓内^い遺物^{ぶつ} 一括^{いっかつ}

所 有 者：^{まつばらし}松原市(松原市教育委員会)

所 在 地：^{あ お}松原市阿保 1 丁目 1 番 1 号(松原市役所)

年 代：^{へいあん}平安時代初頭(9 世紀前半)

材質・法量等：須恵器壺 口径 9.5 cm、器高 23.6 cm、
底径 12.4 cm、最大径 23.4 cm、1,834 g
須恵器蓋 口径 12.4 cm、器高 3.0 cm、179 g

〔説明〕

○^{たつべいせき}立部遺跡の概要

本資料が出土した立部遺跡は、^{まつばらし}松原市立部・^{おか}岡・^{しばがき}柴垣・^{にしおつか}西大塚に位置する^{じょうもん}縄文時代～近世の^{きんせい}集落跡・^{しゅうらく}社寺跡・^{しゃじ}古墳・^{こふん}その他の墓・生産遺跡である。遺跡は、南^{はびきのきゅうりょう}の羽曳野丘^{かわちだいち}陵からのびる河内台地上に位置する。これまでに実施された発掘調査では、古墳～^{へいあん}平安時代の墓や^{なら}奈良～^{かまくら}鎌倉時代を中心とする^{ほったてばしらたてもの}掘立柱建物や井戸などの集落跡が確認されている。

○調査の概要(図 1～3)

^{ぞうこつき}蔵骨器は、^{へいせい}平成 2 年(1990)に立部 3 丁目 399-1 に所在する市立大塚青少年運動

広場の施設整備工事に伴い、松原市教育委員会が実施した発掘調査で出土した。

調査地は河内大塚山古墳(大塚陵墓参考地)の南約 300mに位置し、東側にはかつて開析谷を利用した溜池の上ノ池が存在した。この調査では、古墳時代中期～平安時代前期にわたって連綿と営まれた在地氏族の墓域を確認した⁽¹⁾。主な墓は、古墳時代中期～後期の古墳 7 基、飛鳥時代の土壙墓 1 基、奈良時代の火葬墓 1 基、平安時代初頭の火葬墓 1 基、平安時代前期の木棺墓 1 基、土壙墓 1 基などで、このうち、蔵骨器は平安時代初頭の火葬墓から出土した。

○蔵骨器の出土状況(図 4、写真 1～3)

蔵骨器が出土した土壙は一辺約 1m、深さ 0.2mの規模で、底は蔵骨器底部の大きさに合わせてさらに 5～10cm 掘りくぼめていた。土壙の底には木炭が敷かれており、その上に据え置かれた蔵骨器は肩部付近まで土壙の掘削土に炭を混ぜた土で埋められていた。全体ではないが木炭で蔵骨器を囲い、高級貴族が葬られた事例がある木炭槨に準じる構造をもつ。また、蔵骨器の壺に被せられた蓋は粘土で固定し密封されており、ていねいに埋納されたことがうかがえる。粘土による固定は現時点で他に類例がなく貴重である。

なお、土壙からは蔵骨器とともに納められた可能性が高い土師器の杯の破片が出土しており、土器の特徴は平安時代初頭(9 世紀前半)のものである。

○蔵骨器の概要(図 4、写真 4～6)

火葬骨が納められていた蔵骨器は、須恵器の壺と蓋からなる。

壺は灰色の短頸壺で、頸部は短く立ち上がる。口縁部付近に蓋と壺を固定した粘土が残存する。一見すると畿内で一般的に出土する壺の形状に類似するが、頸部や口縁部の特徴が異なるため、生産地は畿外と考えられる⁽²⁾。

壺内部には肩部付近まで木炭と焼土^{しょうど}の混じった火葬骨が納められていたが、
副葬品^{ふくそうひん}は伴っていなかった。火葬骨の埋納に規則性は認められず、ノド仏を最後
に安置する作法も確認することができなかった。

暗灰色の蓋は輪状つまみをもつが、この蓋は畿内で珍しく、壺と同じく生産地
は畿外と考えられる。

○火葬骨の概要(図5～9、写真6～7)

蔵骨器に納められた火葬骨は熟年^{じゅくねん}(40～59歳)の男性1人分である。骨量は全身
の約半分で、上腕骨^{じょうわんこつ}・大腿骨^{だいたいこつ}・脛骨^{けいこつ}がほぼ丸ごと、頭蓋骨^{ずがいこつ}も半分が埋納されるな
ど火葬骨としては例外的に埋納量が多く、残存状況も良好であった。観察結果か
ら軟部組織^{なんぶそしき}(筋肉)が残存した状態で火葬されたと考えられる。

骨から推定される男性の身長は158～160cmで、上半身の筋肉が発達していた
ことがわかった。また、骨に含まれるストロンチウム^{どういだいひ}同位体比の分析から、比較
的栄養度の高い食事を摂取できる人物であったと推定できる。

火葬骨及び共伴した木炭の放射性炭素年代測定^{ほうしゃせいたんそねんだいそくてい}によると、死亡年代は770年～
900年(奈良時代後期～平安時代前期)となる確率が最も高い。木炭が火葬骨よりや
や古い年代(660～770年)を示したことを勘案すると、800年頃に死亡したと考え
られる。

○火葬地の推定(図10)

蔵骨器内の焼土・壺と蓋を固定した粘土・火葬墓周辺の土についてストロンチ
ウム同位体分析を実施した結果、全て同じ地質^{ちしつ}に由来すると推定された。焼土は
被葬者^{ひそうしゃ}を火葬した後に収骨する際に混入したものと推定されるため、被葬者は蔵
骨器の産地ではなく、立部遺跡周辺で火葬され蔵骨器に納められた可能性が高い。

この結果から、蔵骨器に利用された畿外産の須恵器壺と蓋は (1)被葬者の死亡後に遠方から蔵骨器を入手した、(2)被葬者が生前所有していたものを蔵骨器に転用した、(3)被葬者が遠方の赴任地で死亡し、赴任地で入手した壺を蔵骨器に使用した⁽³⁾、いずれかにあたると想定される。

○評価(図 11)

本資料は、古墳時代中期～平安時代前期にかけて連綿と営まれた在地の氏族墓地内の火葬墓から出土したもので⁽⁴⁾、共に出土した土師器の杯の年代観及び火葬骨等の炭素年代測定結果から平安時代初頭(9世紀前半)に比定される。本資料が納められた火葬墓は、封土など上部構造は残存しないものの、下部構造は埋葬施設のみならず埋納された蔵骨器までもが良好な状態で残されていた。また、蔵骨器の壺と蓋が粘土で密封されていたことにより、熟年男性1人の約半分という例外的に多量の火葬骨が当時の状況を保ち納められていた。このように良好な状態で発掘され、被葬者や火葬地について多くの情報を得ることができた例は少なく貴重である。

さらに、火葬骨の残存状態が良好なことから、自然科学分析によって被葬者について、(1)熟年(40～59 歳)の男性、(2)身長 158～160cm で、上半身の筋肉が発達していた、(3)比較的栄養度の高い食事を摂取していた、(4)西暦 800 年頃に死亡し、立部遺跡周辺で火葬された、以上のことが判明した。

本資料に納骨された男性の身分については、火葬墓の構造と階層性を検討した小田裕樹の研究⁽⁵⁾が参考になる(図 11)。蔵骨器の外側に槨⁽⁶⁾をもち、金属・ガラスなどの高級素材蔵骨器を持つ I 型火葬墓の被葬者を従五位以上の高級貴族に比定し、II 型・III 型火葬墓の被葬者は下級官人を輩出する在地氏族層に比定している⁽⁷⁾。立部遺跡の火葬墓は、木炭槨に準じる構造をもち、蔵骨器は須恵器製であること

から、分類の II 型に相当すると思われる。よって、被葬者の男性は従五位以下の官人を輩出する氏族の出身者と考えられる。

調査地は古代の河内国^{かわちのくに}丹比郡^{たじひぐん}にあたり、被葬者の出身氏族としては古くから葬送に関わる職^{しよく}掌^{しょう}を担った土師氏^{はじし}や画師^{えし}を務める官人を輩出した河内画師などが考えられる。両者の本拠地と考えられる丹比郡土師郷(里)は、堺市域^{さかいし}と松原市域に比定する説があり、松原市域では松原市立部周辺が比定されている⁽⁸⁾。本火葬墓に直接関わる文献史料は確認されておらず氏族名は不明であるが、少なくとも古くから立部周辺を本拠とした氏族の墳墓^{ふんぼ}であったと考えられる。

以上のように、立部遺跡出土須恵器蔵骨器(壺・蓋)は古代の丹比郡における葬送儀礼^{そうそうぎれい}や在地氏族の墓制^{ぼせい}の一例を示す貴重な考古資料であり、今後、考究する上で基準となる資料であることから、本市指定文化財に相応しい。

【註】

- (1) 本資料及び出土地点の詳細や自然科学分析の成果については、松原市教育委員会 2021 『立部遺跡・立部古墳群』松原市教育委員会を参照。
- (2) 近隣で搬入品を蔵骨器に用いる事例は、大阪市の長原遺跡(大阪市文化財協会 1997『長原・瓜破遺跡遺跡発掘調査報告』XI)、柏原市の大平寺・安堂遺跡(柏原市教委 1984『大平寺・安堂遺跡』1983 年度)が挙げられる。
- (3) 律令の【喪装令 7】「官人從征条」には、官人が出張先で死亡した場合は、葬具が支給されるとある。また、藤原京で文武天皇に仕えた伊福吉部徳足比賣は、蔵骨器の銘文によると、和銅元年(708)に大和国(奈良県)で死亡した後、3 年後の和銅 3 年(710)に因幡国(鳥取県)に帰葬し、火葬されている。立部遺跡の本資料の被葬者については、自然科学分析により火葬自体は立部遺跡周辺で行われたと推定されるが、死亡地は不明である。火葬骨の人類学的鑑定からは、筋肉が残存した状態で火葬されているため、骨化に至る期間や防腐など死亡後の遺体の輸送方法が課題となる。気温の高低も関係するが遺体が骨化しない期間(距離)での輸送、あるいは防腐対策を行った輸送であるならば、支給された葬具とともに遺体が本貫地の河内国(大阪府)に帰葬し、火葬された可能性も考慮する必要がある。
- (4) 大阪府下では、立部遺跡と同じく平野部に営まれた在地氏族墓地としては土師の里遺跡(藤井寺市)がある。また、山地・丘陵に形成された事例としては、田辺墳墓群(柏原市)、寛弘寺遺跡(河南町)などが挙げられる。
- (5) 小田裕樹 2011 「墓構造の比較からみた古代火葬墓の造営背景」『日本考古学』32 日本考古学会
- (6) 註(5)文献によると、蔵骨器の外側に設けられる施設で、石槨・粘土槨・木炭槨・石櫃がある。
- (7) 註(5)文献によると、II 型火葬墓は須恵器壺 A を用いて、蔵骨器の周囲を瓦や石組みで囲む構造のほか、須恵器や土師器大甕の中に蔵骨器を納める構造をもつという。一方、III 型火葬墓は蔵骨器専用容器ではなく、転用品を素掘りの土坑に納めるものである。蔵骨器と埋納施設の違いから、III 型を II 型よりやや低い階層に比定している。
- (8) 小出義治 1951 「大和、河内、和泉の土師氏」『國史学』54 國史学会、松原市史編さん委員会 1985 『松原市史』第 1 巻 松原市役所、塚口義信 1998 「天皇陵の伝承と大王墓と土師氏」『網干善教先生古希記念考古学論集 下巻』網干善教先生古希記念論文集刊行会など。土師氏については、多数の系統があり、本貫地も様々である。

【参考文献】

- ・小田裕樹 2004 「奈良県葛城市三ツ塚古墳群・古墓群の形成過程—古代氏族墓地の基礎的研究—」『九州と東アジアの考古学—九州大学考古学研究室 50 周年記念論文集—上巻』九州大学考古学研究室 50 周年記念論文集刊行会
- ・小林義孝 2004 「古代の火葬と火葬墓」『古墳から奈良時代墳墓へ—古代律令国家の墓制』大阪府立近つ飛鳥博物館
- ・(公財)元興寺文化財研究所・松原市教育委員会 2020 『たじひのだより』No.19 松原市教育委員会
- ・松原市教育委員会 2021 『立部遺跡・立部古墳群』松原市教育委員会：<http://doi.org.10.24484/sitereports.106098>



図 1 調査地位置図

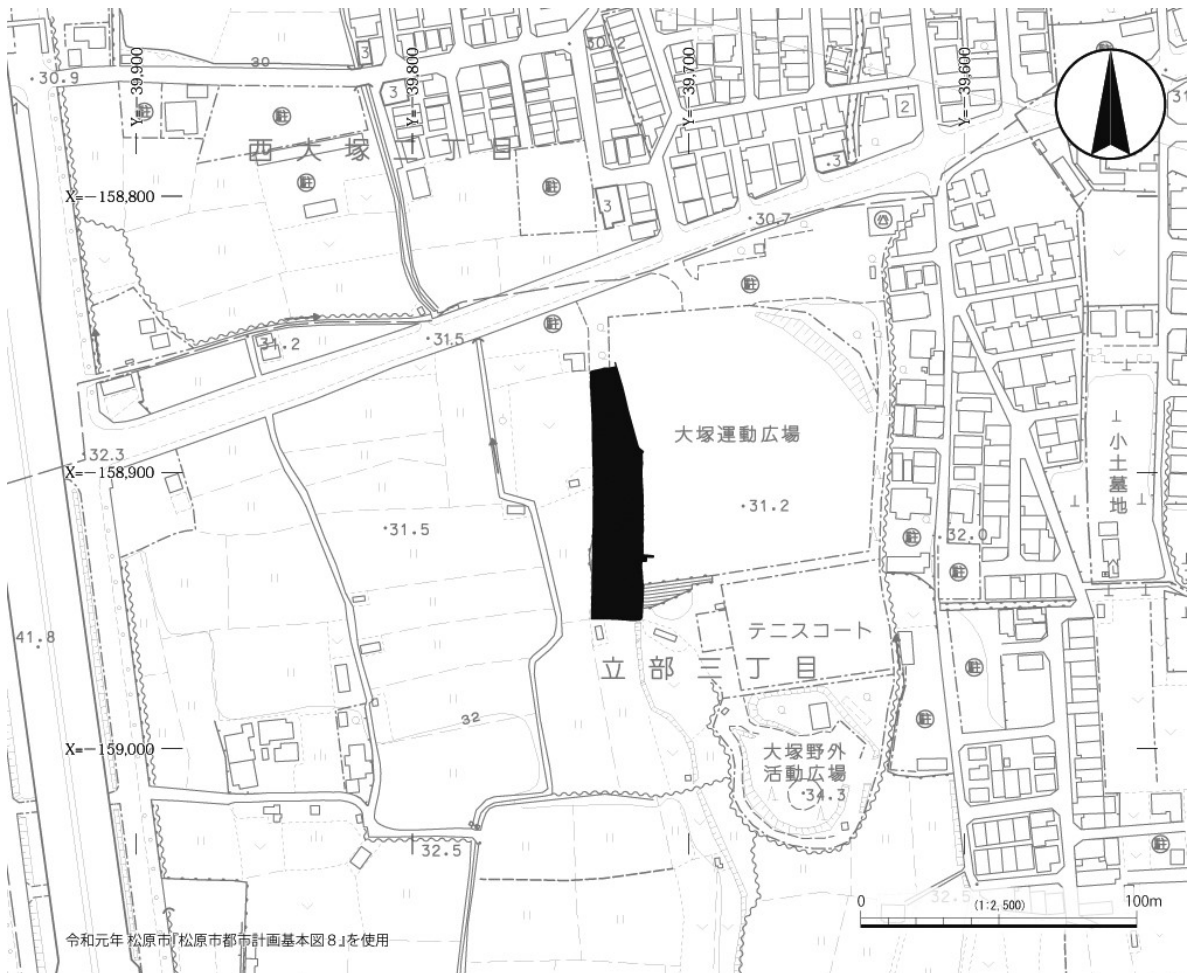


図 2 調査区位置図



図3 遺構配置図

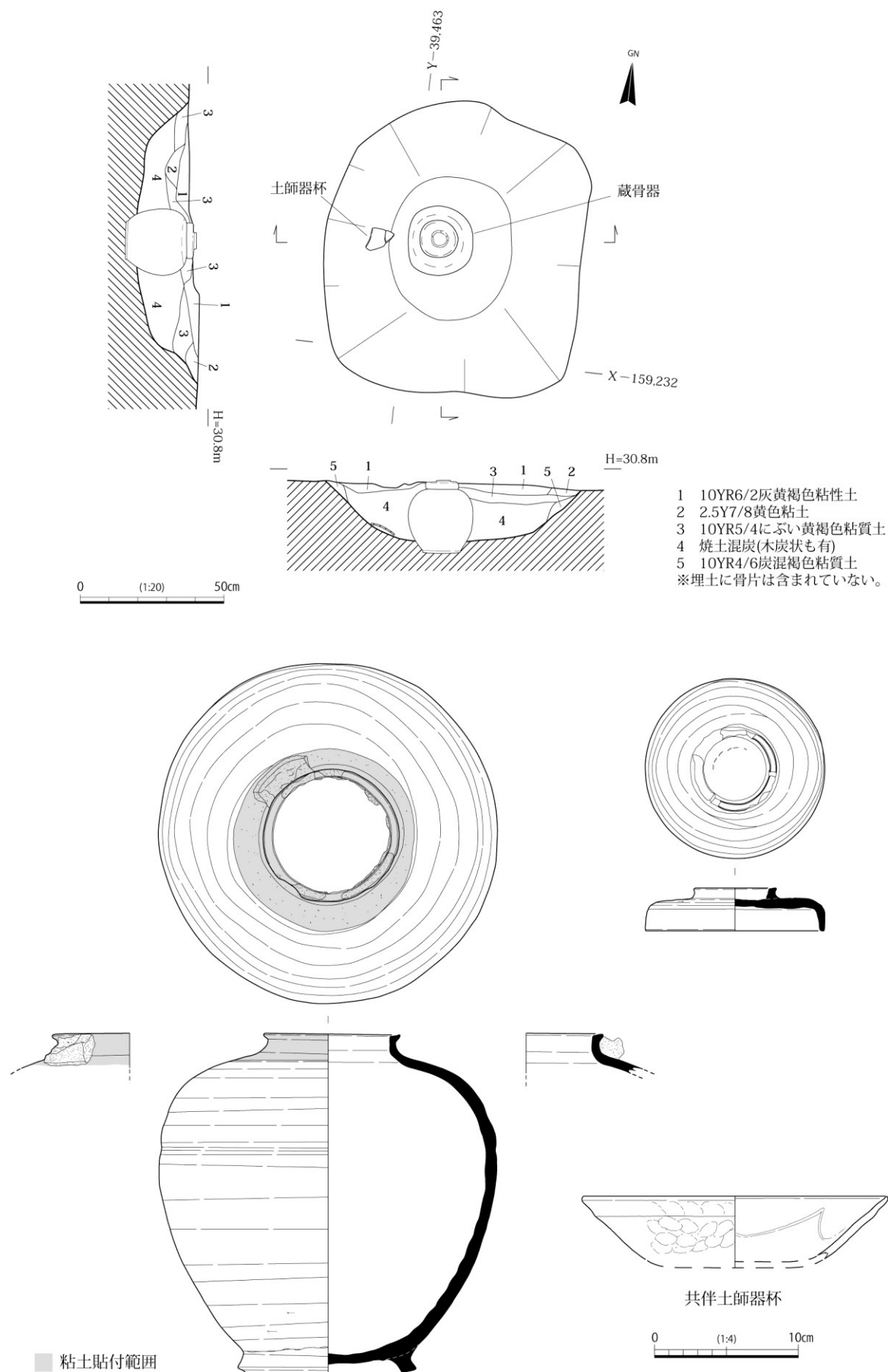


図4 火葬墓 ST2005 出土状況図、蔵骨器・出土遺物実測図



写真 1
火葬墓 S T 2005
土層断面



写真 2
火葬墓 S T 2005
口縁部付着粘土



写真 3
火葬墓 S T 2005
完掘状況



写真4 火葬墓 ST2005 出土遺物 火葬骨・木炭・焼土



写真5 火葬墓 ST2005 蔵骨器



写真6 火葬墓 ST2005 蔵骨器蓋



写真7 蔵骨器X線CTスキャン

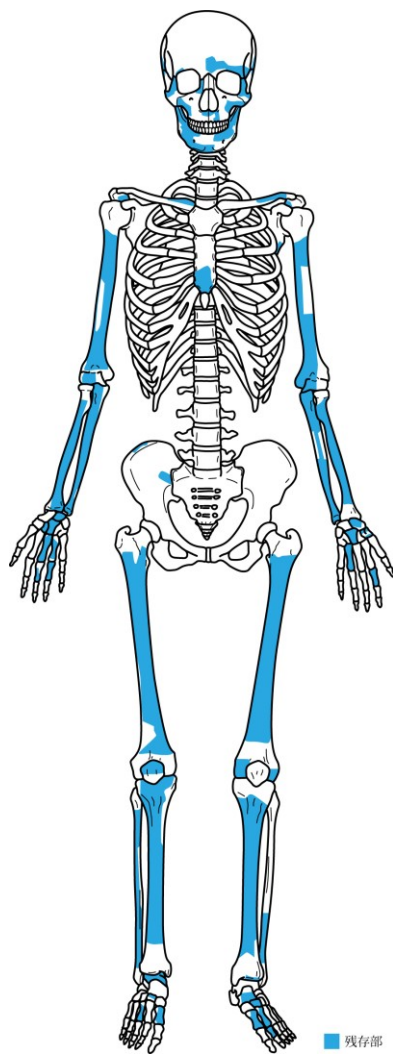


図5 人骨残存図

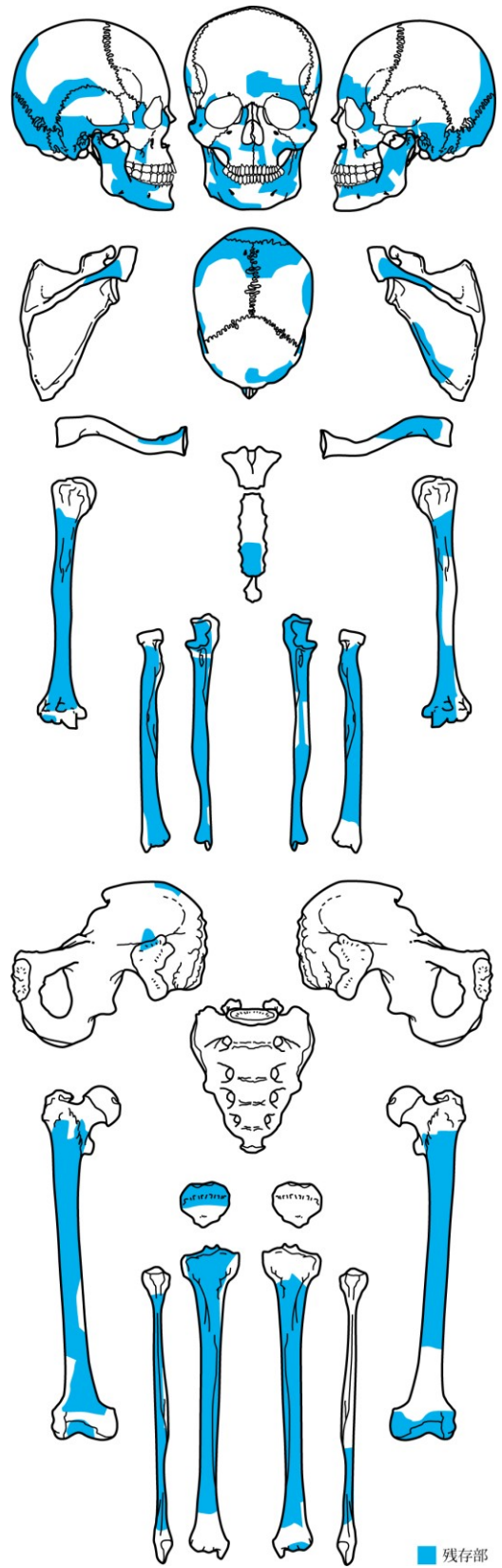


図6 人骨残存図(展開)男性・熟年

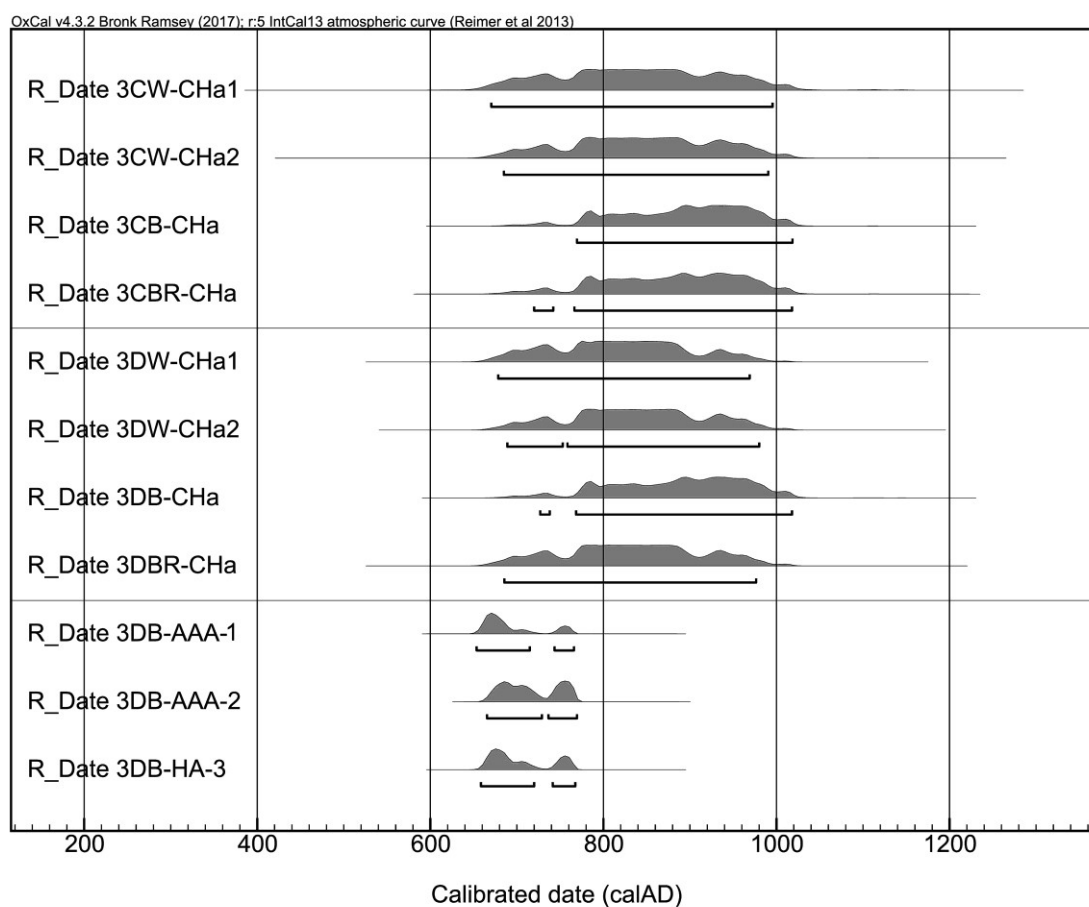


図7 3C層、3D層の黒色骨片と白色骨片の ^{14}C 年代

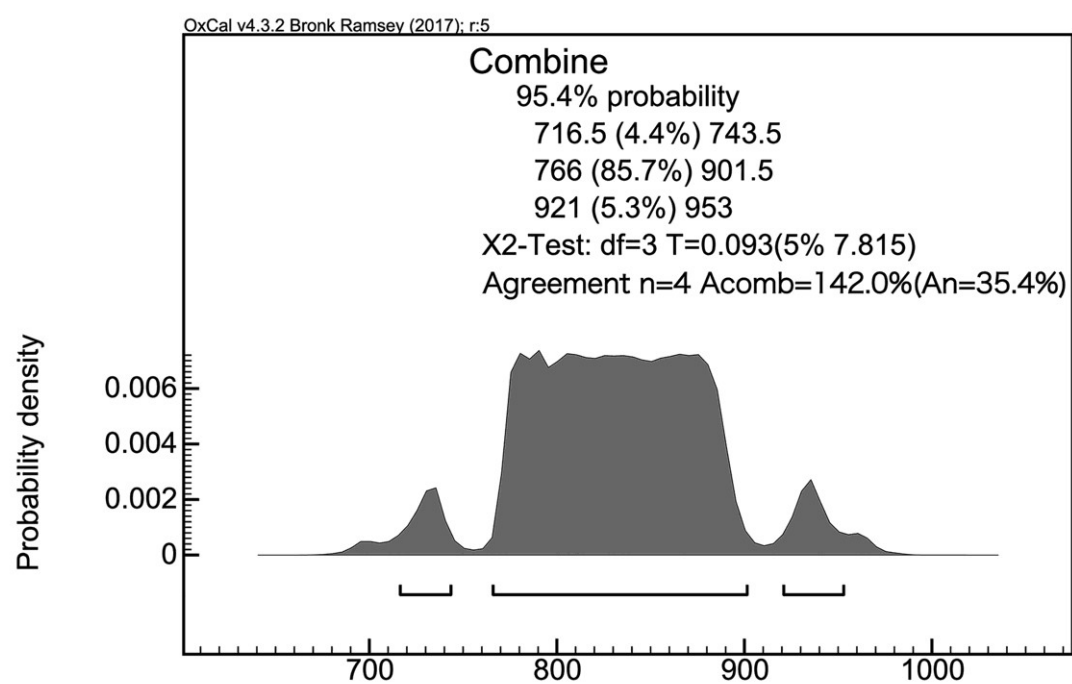


図8 白色骨片4試料のCombine年代

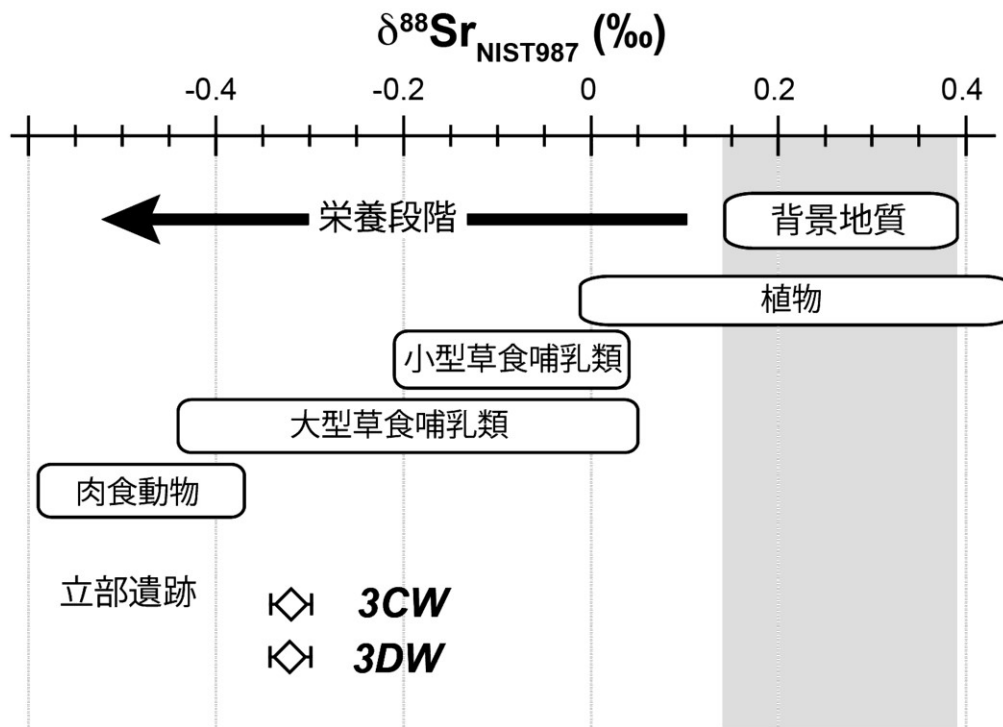


図9 安定ストロンチウム同位体を利用した食性解析

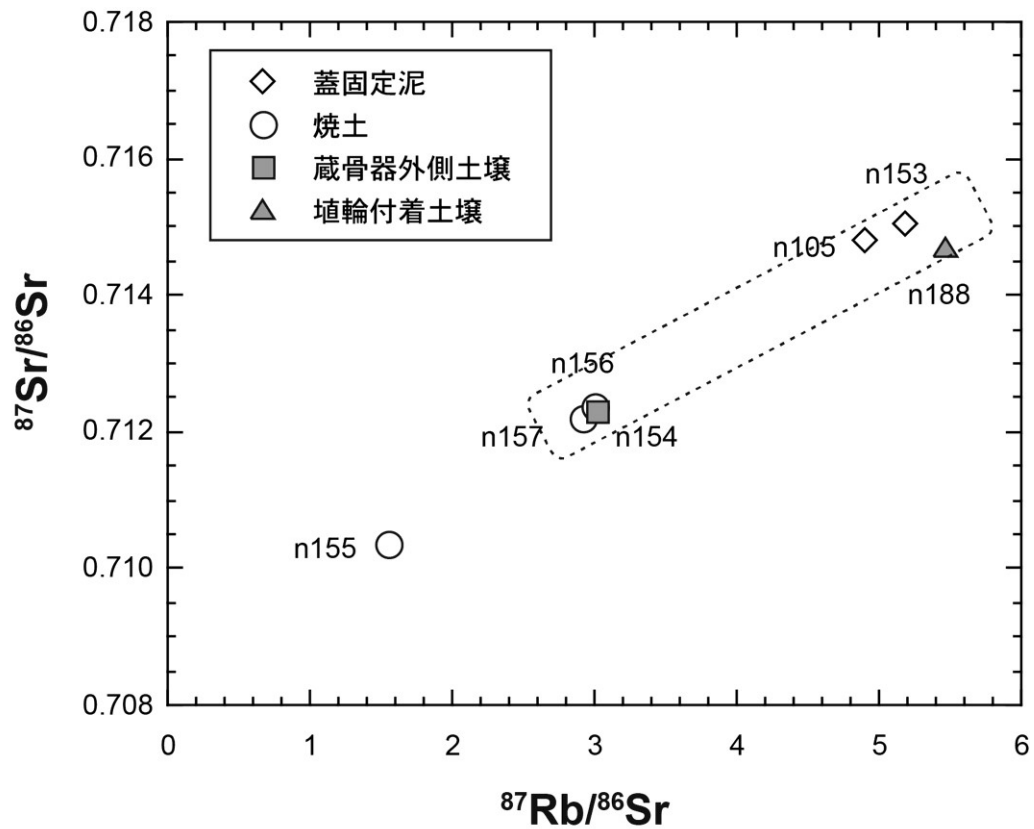


図10 土壌試料の Rb-Sr 放射壊変系分析結果

【出典】

図 2・4・7～10、写真 1～7：松原市教育委員会 2021『立部遺跡・立部古墳群』松原市教育委員会

図 1・6：松原市教育委員会 2021『立部遺跡・立部古墳群』松原市教育委員会 所収図面を一部加工

図 3・5：(公財)元興寺文化財研究所・松原市教育委員会 2020『たじひのたより』No.19 松原市教育委員会

松原市指定文化財調書

立部遺跡火葬墓出土須恵器蔵骨器(壺・蓋)

附火葬骨ほか火葬墓内遺物

発行年月日 令和 4 年 9 月 29 日

編集・発行 松原市教育委員会

〒580－8501

大阪府松原市阿保 1 丁目 1 番 1 号

Tel 072-334-1550(代表)
